日刊工業新聞
年月日 13 12 11
ページ 20
NO.

飛躍できるか 大学発VB ◇19

カテキンで感染症対策貢献

プロテクティア

プロテクティアは、お茶の渋みの成分として知られる天然カテキンを生かした「カテキン誘導体」の実用化に取り組む。カテキン誘導体は大阪大学産業科学研究所の開發邦宏特任准教授が、英での研究留学中に「香りを楽しむために窓際で飲み終えた茶葉を乾燥させていたところ、紅茶はカビが生えていたが緑茶にはなかった」ことが開発の経緯になっている。

開發准教授が2005年8月に阪大に着任後、阪大ベンチャービジネスラボラトリー（VBL）、新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）など、続けざまにカテキンの研究内容が助成対象として採択された。これらをステップに、パイプがあった開發准教授を取締役技術責任者として招聘（しょうへい）。その上で、内田国克（くにかつ）社長は起業を決意したが、「企業との共同研究推進よりも、大学の技術のもとづく製品・サービスを世の中に出すことを強く意識していた」と話す。

折しも鳥インフルエンザなど、感染症への対策が世間をにぎわせていた時期。「ニーズに対応できる応用力を磨きたい」（内田社長）と、プロテクティアの研究開発が生かせる市場環境がそろいつつあった。実際、NEDOの助成が終了した10年から3年を費やして13年に開発したのが、抗ウイルス機能に優れるエピガロカテキンガレート（EGCG）がウイルスや細菌の膜に作用する成分「カテプロテクト」だ。

化合物のカテプロテクトは見た目は粉末で「マスク、消毒スプレーなどと展開幅が広い」と内田社長、開發准教授は強調する。感染症対策製品への搭載の拡大幅が多く見込めるが、カテプロテクトの機能が十分に発揮できるようにするための混合度合いが何より重要となる。ここに独自ノウハウがふんだんにある。

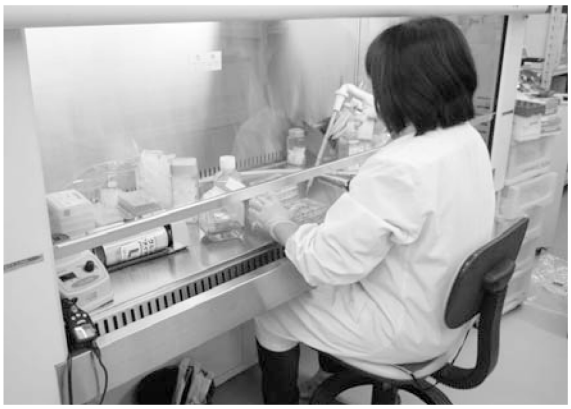
開発型VBで営業マンがいないプロテクティアは、不織布などの製品にカテプロテクトが採用されることを見越し、化学製品を扱う商社と提携。販路拡大に備えている。

カテプロテクトの製品名はブランドコンセプトをもとに、社内で出した候補を絞り込んで選定した。「プロテクティアという社名よりもカテプロテクトという優れた技術を前面に出したい。だから自分自身も〝黒子〟でいたいと思っている」と内田社長は話す。応用範囲の広さが武器となり、将来的な可能性を秘めるカテプロテクトに社運を託している。（林武志）

（隔週水曜日に掲載）

プロフィル

▶設立＝10年6月▶所在地＝大阪府茨木市彩都あさぎ7の7の15▶電話＝072・657・7816▶研究機関との連携＝阪大産業科学研究所など▶資本金＝1000万円▶売上高＝非公表▶事業内容＝感染症対策部材の研究開発・製造



インキュベーション施設で研究開発に取り組むプロテクティア（同社提供）

無断転載・複写禁止 ㈱日刊工業新聞社